

# 鯨エマさん

(役者・劇作家)

## シニア劇団は人生の歩みと共に

「この世はすべて舞台」とはシェイクスピアの言葉だが、定年退職や子育ての終わりを機に、舞台演劇に「もう一つの人生」を賭けるシニア世代がいる。舞台人や映像作家としての活動の一方、シニア劇団主宰者としても活躍を続ける鯨エマさんに話を聞いた。

### 舞台のバリアフリーを目指す

——鯨エマさんが、演劇経験がほとんどない六十歳以上のの人だけを集めた劇団「かんじゆく座」を立ち上げてから七年が過ぎました。一昨年には鯨さんが中心となり、東京・池袋のシアターグリーンで、日本各地で活動する十六のシニア劇団が一堂に会した全国シニア演劇大会を開催。さらに今年、山梨県南アルプス市で第二回の全国シニア演劇大会を開きました。そもそもなぜ、当時三十三歳だった鯨さんはシニア劇団を旗揚

げたのでしょうか。

十九歳で初舞台を踏んで以来、舞台だけではなく、ドラマやCM、声優などの仕事を続けてきた私に転機が訪れたのは、三十歳前後のときでした。

売れはじめると同世代の仲間も出てくる一方、思うような成果を残せずに業界から足を洗う友人も増えていきました。私はやる気満々だったのですが、周囲の状況を見ていて、私にしかできない演劇との関わり方を模索するようになったんです。

ただしシニア劇団という発想がすぐに浮かんだわけではありません。きっかけは、役者のギャラだけでは

食べていけずにいままも続けている身体障害者介助のアルバイト。親しくなった身障者の方たちが、私が出演

する芝居を観に来てくれるようになったのですが、小劇場はバリアフリーからはほど遠いありさま。電動車いすは、本体だけで一〇〇キロ以上あるから階段を持ち運ぶのは難しい。エレベーターもない、通路が狭い……。もっと多くの人に芝居を観てほしかった私は、音声ガイドや点字のチラシなどを作って、劇場のバリア

フリー活動をはじめたんです。

ただ思うほど客足は伸びませんでした。それなら劇場のバリアフリーサービスを障害者だけではなく、高齢者にまで広げたらどうだろうかと考えました。でも需要はほとんどなく……。有名な女優さんが主演するきらびやかな舞台には足を運ぶシニアの方々が多いのですが、私たちがやっているような小劇場の芝居は人気がないみたいなんですよね(笑)。

そんな活動を続けるなかで、芝居を観るよりも演じてみたいと感じているシニアの方が多いのが分かってきました。それなら演じるサポートをしようとシニア劇団立ち上げ準備に入りました。

——準備にはどのくらいの期間がかかったのですか。  
アイデアが浮かんでから旗揚げまでは、半年もなかったのではないかと思います。はじめての体験レッスンが二〇〇六年九月だから、立ち上げに向かって動き出したのはその年の春だったでしょうか。

——すごい行動力ですね。

私、思いついたらあまり考えず、すぐに行動に移しちゃうタイプで、協力してくれる友人たちにも実行するのが早過ぎると苦情をいわれるんですよ(笑)。



●くじら・えま 一九七三年神奈川県大磯町出身、劇団青年座などを経て、劇団海千山千草、劇団かんじゆく座主宰。鯨エンターテイメント代表。ドキュメンタリー映像作品に、南群島慰霊墓参団の人々を追った『マン』と『黒砂糖』(二〇〇五年)、かんじゆく座の人々を描いた『つばより花舞』(二〇〇九年)がある。